

静波の家

「なんだと、チメエにそんな口たたけるのかよー」少しくらい頭がいいからって、生意気言うな。なんだ、いい子ぶりやがつて！」逆上した静波は、妹への憎しみを、もはやセーフすることなど出来なかった。止める術もないまま、身に危険を感じた専吉さんは、二〇番

通報した。駆けつけた平塚署員に、専吉さんはゴミ箱の中に捨ててあった女物のハンドバッグを差し出した。「これは息子がひったくりで持ち帰ったものです」静波の重なる暴力に、専吉さんは、もうがまんが出きなかった。親が息子の処置を警察の手に委ねたのである――祝儀されざる青春

遠藤 允

新声社

万落丁・乱丁の際はおとかりたいします。
六三三(分)六三三(製)四一九四(出)

振替 東京五九一〇四二〇 印刷所 壯光舎印刷 東京了ー卜印刷

電話 〇三二九二二一四

下 一〇一 東京千代田区内神田 一一一 五一一 柴田ビル

發行所 新聲社
發行人 加藤博

暑者遠藤允

一九八三年八月十日 初版發行

一九八三年八月十日

静波の家 定價 五〇〇三十一

橫濱市緑区在住

『長編小説』の判決（同時代社）

一九七〇年、新聞記者となり現在に至る

橫濱市立大学文学部

一九四六年、山口県生まれ

遠藤 允 (えんどう まさひと)

遠藤

静波の家

装帧 · 杉浦康平
鈴木一誌

「静波の家」
目次

目次

歪んだ復讐

一瞬の凶行に絶命…… 9

執拗な電話と訪問…… 35

事情聴取は二千人…… 56

口封じに共犯殺害…… 83

裁きの庭

調べでは全面自供…… 113

黙秘権行使の公判…… 135

はみだして二十一歳

御殿をたてたい…… 169

愛の配分薄く…… 186

引き取り拒否…… 201

祝福されざる青春…… 216

他人の眼…… 232

束の間のラブストーリー…… 242

母子の休戦協定…… 247

愛情飢餓…… 256

あとがきに代えて…… 264

歪んだ復讐



一瞬の凶行に絶命

——ぼくのことをわすれないでほしい

中学の卒業記念文集に載せるクラスの寄せ書きに、男はそう書いた。十五文字は波打っている。すでに書き終わった同級生のメッセージの間に、遠慮するような格好で平仮名が埋め込まれた。

ロッキード事件が噴き出た昭和五十一年春、男は中学を卒業するとすぐ、学校の紹介で自宅に近い自動車部品工場に就職した。しかし、わずか三カ月で辞めてしまう。その後、男は定職に就くことがなかった。

成人するまでの間、男は三カ所の少年院に入っていた。十八歳から二十歳までの、三回の誕生日は、いずれも少年院で迎えている。在院期間は通算で二年三カ月に及ぶ。正確には、成人してもなお、少年院を出ることが許されなかった。異例の扱いの部類に入る。

ようやく退院がかった日、新聞やテレビは、タフガイ石原裕次郎の胸部動脈瘤りゅうの手術成功を、派手に取り上げていた。昭和五十六年五月八日である。

ちょうど一年後の五十七年五月八日夜、二十一歳になっていた男は、神奈川県藤沢市ふじさわの会社

員宅を訪れた。半年前に知り合った高校生の長女に思いを寄せ、交際を続けたい一心から、「貸した金を返せ」と要求していたが、この日ばかりは、度重なるしつこさに音をあげた会社員一家に――〇番通報される。

ほうほうの体で逃げ出した男の胸に、「一家皆殺し」の残忍な炎が燃え上がった。

偶然に出会った少年院仲間の少年を誘い、凶器を携えて会社員宅に押し入ったのは、十九日後である。

男は、母娘三人を惨殺し、その直後には、共犯の少年をも口封じのため殺す。八カ月前には、別の少年院仲間も殺していた。

中学卒業からのおよそ六年間、同級生たちは、男の存在をほとんど忘れていた。男が「ぼくのことをわすれないでほしい」と望んだにもかかわらず、中学校在学中の印象がまことに薄かったからである。

五人殺害事件で、はからずも思い出さざるを得なくなってしまう。そういえば、風変わりな名前だった――と。

藤間 静波――ふじま・せいはいは、と読む。

名前だけ見れば、実にたおやかである。豊かなイメージさえかきたてられる。

しかし、藤間の行為は恐るべきものだった。

凶行中、包丁や繰り小刀でめつた突きにしたあと、それらの凶器を遺体に突き立てたまま逃

走した。その手口は、「証拠になるものは身につけない」という、藤間なりの計算高い知恵が働いていたにせよ、検視に立ち会った捜査員の目をそむけさせた。

三件の犯行の中でも、とりわけ藤沢市の母娘三人殺害事件は、被害者が犯罪とは無関係の平和な生活を送っていただけに、一家を知る人たちを、悲しみのどん底に突き落とした。静かな住宅街で引き起こされた惨劇は、残忍そのものだった。

昭和五十七年五月二十七日夜――

平年より三度高かった昼間の気温は、夜に入っても急激に下がることなく、確実に夏が近いことを感じさせた。

藤沢市辻堂神台二ノ七ノ三の会社員畑光治さん（四六）方では、妻の晴子さん（四五）、長女の真輝子さん（二六）、次女の真理子さん（二三）が、遅めの夕食をとろうとしていた。光治さんは、残業のため、まだ帰宅していない。

畑さん方は、国鉄辻堂駅から北へ一キロの国道1号近くにある。西側には生コン会社や製鋼会社のグラウンドなどがあるが、周辺は一戸建て住宅や会社寮が建ち並ぶ新興住宅地だ。畑さんの家は道路から二軒目の、二階建て住宅である。

光治さんがこの朝七時、会社へ出勤する時には、真輝子さんも真理子さんも、布団の中で眠っていた。

真輝子さんが二年生に在学中の神奈川県立茅ヶ崎高校では、この日から一学期の中間試験が

始まるため、前夜は遅くまで勉強していたようだ。そんな姉の横で、藤沢市立明治中学二年の真理子さんは、テニス部員だったから、クラブ活動の疲れが残っていたのかもしれない。

晴子さんだけが、光治さんを見送った。

「行つてらっしゃい」

いつも通りの笑顔を見せた晴子さんの、それが最後の言葉になつてしまった。

その夜、九疊の洋間の食卓に、こんがり焼けたアジの開きやワカメ入りの味噌汁が並べられ、ピアノの横に置いてあるテレビを見ながらの食事が始まろうとしていた。晴子さんは、テレビの画面が見にくい位置の椅子に腰をおろし、真輝子さんと真理子さんが反対側に並んで座った。玄関に近いほうが真輝子さんだった。

真輝子さんが、ご飯をほんの一口食べた時だった。玄関のチャイムが鳴り響いた。箸を置いた晴子さんと真理子さんが玄関へ出た。真輝子さんは、テレビのチャンネルをフジテレビの「スターどっきり秘報告」に換えようと立ち上がった。

「新聞屋ですけど」

玄関の外側から聞こえてくる声に、誰にも覚えはなかった。が、晴子さんは玄関のドアを開けるため、三和土におりた。居間にいる真輝子さんにも、何らの疑いもわかなかった。

偶然とはいえ、この日の昼すぎに、真正正銘の新聞集金人が、畑さん方を訪れていたのである。家にいたのは、中間テスト初日の英語と世界史を無事終えて帰宅していた真輝子さん一人

だった。

「母がいないので、また来て下さい」

若い集金人に、この時、真輝子さんはそう答えた。パートの仕事を終えて午後四時過ぎに帰宅した晴子さんは、真輝子さんから新聞の集金人が来たことを聞いていたはずだ。改めて出直して来たのだと考えたとしても、無理はない。

玄関の外に、殺意を秘めた二人の男が立っているなどとは夢にも思えず、晴子さんは何のためらいもなくチェーンを外し、ドアを内側から押し開いた。

間髪を入れず、男たちが飛び込んで来る。

二番目の男を見て、晴子さんは息をのんだ。

真輝子さんにつきまとい、二十日近く前の五月八日夜にも押しかけて来て、光治さんが一番しているうちに姿を消した男が、目をぎらつかせて身構えていたのである。

手袋をはめた右手には、包丁が光っていた。

晴子さんが立ちすくむ一瞬の間に、初めて顔を見る体格のよい男が、素早くチェーンをかけ、電話線を切斷した。

晴子さんと真理子さんは、悲鳴をあげながら、凶刃から逃れようと奥に走った。土足で駆け上がった二人の男……。

「このヤロー、バカにしやがつて」

男は怒鳴りながら包丁を振りかざし、目の前にいる真理子さんに襲いかかった。次に、台所

に逃げ込んだ晴子さん、さらに台所と居間の境に茫然と立ち尽くしている真輝子さん——と、男の凶刃は執拗に振りおろされた。

周到的な準備と、刺突訓練まで重ねた屈強の若い男を前にして、母娘三人は抵抗する間もなく、逃げることもかなわないまま、背中や胸などをめつた刺しにされ、息絶えた。

真輝子さん、真理子さんとも心臓に達する深傷が致命傷となり、ほとんど即死状態だったが、真輝子さんの傷が全部で七カ所なのに、真理子さんのそれは二十カ所近くにも及んだ。

晴子さんだけが、かろうじて台所のドアを開けて外まで這って出たが、気づいて追いつがる藤間に繰り小刀を突き立てられた。息絶える直前、しきりに真輝子さんの名を呼んだ。

凶行を終えた二人の男は、玄関から逃走した。

この間、わずかに数分しか長くて五分。凶行中に真輝子さんらが叫んだ「キヤー」という悲鳴、晴子さんが「奥さん、奥さん」と呼びかける声などが、近所の人たちの耳に届いている。

それらや、解剖結果などを総合すると、東京・後楽園球場で行われたプロ野球の巨人・中日戦六回表、中日の大島康徳外野手が2ランホームランを放って七点目を挙げたところ、つまり午後八時前後が凶行時間と推定される。

ちょうどそのころ、光治さんは会社のある厚木市から平塚市内の相模川河川敷にあるゴルフ練習場へ向け、伊勢原市を經由してマイカーで走っていた。二時間の残業を終えてからの、予定の行動だった。三日後の日曜に、社内の親善ゴルフ大会が控えていたため、体を慣らしてお